86. 唾石症における超音波検査の有用性について

Evaluation of Ultrasonic Examination for Sialolithiasis

藤枝市立志太総合病院超音波センター

○秋山 敏一 杉山 高 北川 敬康
(Toshikazu Akiyama) (Koh Sugiyama) (Yoshimichi Kitagawa)
溝口 賢哉 金澤 秋夫
(Kenya Mizoguchi) (Akio Kanazawa)

<はじめに>

唾石の有無にX線撮影が用いられているが、唾液腺と唾石の位置関係、および唾液腺の状態を知るには、唾液腺造影が必要になる。しかし、唾液腺造影は唾石を奥へ押し込んだり、炎症を波及させる恐れがある。今回我々は、唾石症が疑われた患者に超音波検査を施行し、超音波検査の有用性について検討した。

<対象・方法>

唾石症が疑われた患者に超音波検査を施行し、唾石症と確定診断された16例について、唾石の描出能、唾石の位置と大きさ、唾液腺管の拡張、唾液腺の大きさとエコーレベル、リンパ節腫大について検討した。走査法は、下顎骨に沿ったWの走査を行った。ワルトン管下端唾石、舌下腺内唾石が疑われた場合は、術中用探触子を用い口腔内走査も試みた。装置は東芝SSA-250AおよびアロカSSD-650、探触子は7.5MHzの音響カプラ付きメカニカルセクタおよび術中用リニアを用いた。

<結果>

唾石の位置と大きさを Fig.1に示す。顎下腺ワルトン管移行部が6例と最も多く、以下ワルトン管内5例、顎下腺内2例、ステンセン管内2例、耳下腺内1例であった。ワルトン管およびステンセン管内の直径3mm以下の唾石は、X線撮影では指摘できなかったのに対して、超音波検査では全例指摘でき、唾液腺との位置関係も容易に知ることができた。唾石の超音波像は、音響陰影と唾液腺管の拡張を伴うstrong echoであった。唾石に伴う唾液腺の変化では、唾液腺の腫大、唾液腺エコーレベルの低下、リンパ節腫大を認めた。超音波像より唾石症をFig.2に示す4-Typesに分類した。Type. I エコーレベルの低下を認めなかった4例は、生化学検査において炎症所見を認めなかった。Type. II エコーレベルの低下のみ認めた3例中、2例は慢性唾液腺炎であった。Type. III 腫大とエコーレベルの低下を認めた6例中、5例は急性唾液腺炎であった。Type. IV 著明な腫大と内部エコーの不整またはリンパ節腫大を認めた3例は、排泄管より排膿が認められ、急性化膿性唾液腺炎であった。

<まとめ>

超音波検査による唾石描出能は、X線撮影より優れており、唾液腺と唾石の位置関係も容易に知ることができた。さらに、唾液腺の腫大、唾液腺エコーレベルの低下、リンパ節の腫大より、炎症の程度も知ることができた。よって、唾石症に対しても、超音波検査は有用と考えられた。また、X線被爆軽減の立場からも積極的に行うべき検査法であると考えられた。

本演題に対しご指導いただいた当院歯科
宮城島俊雄先生、伊藤正樹先生、澤裕一郎
先生に深謝します。

Fig.1 Location of calculi of salivary glands.

Fig.2 Types of sialolithiasis by ultrasonography.

type	I	II	III	IV
schema				
findings				
swelling of gland	+	±	+	++
decrease in echo level of gland	-	+	+	+ heterogeneous
dilatation of duct	+	±	+	+
swelling of lymph node	-	-	-	+
sialolithiasis \ cases	4	3	6	3
inflammation (-)	4			
chronic sialoadenitis		2	1	
acute sialoadenitis		1	5	
suppurative sialoadenitis				3